

ふみの会 ニュース

■発行 ふみの会広報部

■発行日 2005年5月21日

■連絡先 藤川博樹

〒115-0045

北区赤羽1-48-3 ドミール藤203

tel03-5249-5797 fax03-3901-6090

■編集 塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直

No.283

6月行事日程

■ ニュース編集

原稿はテキストにして下記へ
ワード文書も可

kamo@sun.email.ne.jp

エッセイ: 5枚 (2000字)

小説: 10枚 (4000字) 目安

■ 6月18日(土) 4:30

四ツ谷地域センター 11F

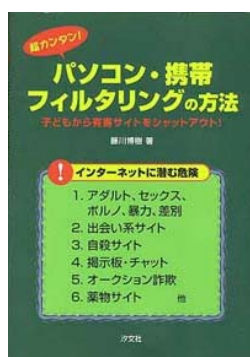
地下鉄丸の内線 新宿御苑下車

四ツ谷方面へ徒歩5分



街頭ブルースバンド: サンフランシスコ・パウエル駅1981年5月

カンパのお礼
*会員の内田さんから切手代のカンパをいただきました。
ありがとうございます。



藤川博樹さんの新刊

「パソコン・携帯
フィルタリングの方法」

(汐文社) 1200円

*子どもをハイテク犯罪
から守る方法を提起して
います。

■5月らしい陽気からは遠く、朝夕は寝床のなかで毛布をひっぱりあげる。玄関先のアヤメもアイリスもまだすくくと立って美しい花を咲かせている。柚子の木は蕾みをふくらませてもない。緑におおわれた山は冷涼な空気に支配されている。しかし、この夕べホトトギスの声を聴く。キョキョキョ...という鳴き声が出肌にあざわらわっていくのをじっと聴いている。季節は確実に進んでいるのだ。■津久井にある組み紐の製造会社から電話をもらった。今月いっぱい仕事をやめるという。ついでに在庫の一部を適当な価格で引き取ってもらえないか、ということである。そうか、ついに、というやりにくい思いがこみあげた。会社をたずねてみると、社長は体調を崩して臥せっていた。煙草のヤニのしみた天井をみあげながら、経理の女性の応対を受ける。この伝統ある地場産業の灯がひとつ消えるのである。自分にながでできるか、といえは、何もできはしない。折悪しく資金も尽きていて、ほんのわずかの量を引き取るに留まった。悔しい。ここで作っていた「古代紫染め特殊織り」はもう採算が合わないから一度と作られることはない。わたしの引き取ったものが最後になった。これが何年保つのか判らないが、大事に使うしかないだろう。工場の機械を中国に売る話もあるらしいが定かではない、と淋しく語る女性の声を背に会社を辞した。■ひとは生きていかなければならない。それは社会がひとを大事にするという前提あつてのことだ。社会の轍は進み、遠ざかる倒れ伏すひとたち。置き去りにされるひとたち。そこにいるのは明日の自分でもある。 (K)

おれたちの村

⑤

蒲原ユミ子

よく日は真つ青に晴れわたり絶好の雪ほり日となった。明るい陽射しがまた2メートル近くもある雪の校庭をまぶしく照らしている。

6年生から順々に校庭の遠くの方へくり出した。きのう、入学したばかりの1年生も小さなスコップを持って出てきた。全校で100人ちよつとだが、みんな雪にはなれている。(中には、健人のようにドジなやつもいるけれど)

陽平たち3年生の割り当ては校庭のはしのジャングルジムの近くだ。みんなキヤアキヤアとにぎやかで楽しそう。だが、陽平はむつりとへの字の口であるシヤベルという物がまだ家がない転校生の森野泉と組まされてしまったのだ。女の子のように長い髪をポニーテールに結んでいる泉はドッジボールが強く、陽平の天敵である。泉はどう思っているかわからないが。

陽平はこういう小さなことで文句は言いたくなかったので、みんなから少しはなれた所ですがしし雪穴をほり出し

た。

直径1メートル以上にしよう。小さいと尻つぼみになって返ってほりにくい。大きい雪穴をほって、桜田先生にほめられたいので、陽平は気合いを入れた。(よおーし！)

陽平は雪を人のいない方へ大きく投げやり、どんどんほっていく。陽平のシヤベルさばきはいつぱしの大人のようでもある。家の雪かきはいそがしい母ちゃんにかわって陽平の仕事になっているから。

半分くらいの深さまでほった。むきになつてほり続けたので、腰と肩がもうれつに痛くなつてきた。穴の外でちよつと休んだ。陽平とヘアのはずの泉が遠くでちやらちやら遊びまわっている。陽平はすこく頭に来たが、(このあなは自分だけほってクラス1番、大きくするんだ)と決心した。去年もそれで先生にほめられたのだ。陽平は肩をぐるぐるまわし、勢いをつけた。

穴は陽平の背丈ほどになつてきた。シ

ヤベルで雪を四角に切つて持ち上げ、穴の入り口である斜めの坂を登つて出て、人の穴のめいわくにならない方に運んですてる。けつこう、根気と知恵がいる。さつき、桜田先生がふうふう言いながら見まわりに来て、

「陽平さん、すごい。6年生みたい！」と感動してくれた。

地面の土が見えてきた。これで終わりである。陽平は雪穴からはい出した。シヤベルを雪にぐさつとさし、ふうつと息をつき肩をぐきぐき回した。まわりのみんなはまだ真つ最中である。

ふと、陽平は近くにやや小ぶりの雪穴があることに気づいた。だれか、とちゆうでやめてほかの所でほっているのだろうか。もどつて来そうにない。まあ、どこで穴をほろうと本当はかまわないのだ。ほつた分だけ、雪が早く消えてくれるから。

その穴を見ていた陽平に、ある悪だくみがわいた。落とし穴である。落としヤツは、もちろんあのにくたらしい泉だ。

陽平の頭はずばやく回転しだした。

重くザラメ状態になつているこの雪は落とし穴には都合が悪い。けれど、ものみなまつしぐらに春につき進んでいる今の季節、真冬にふるふわふわのぼたん雪などあるはずないから、ふたを工夫しよう。そう、段ボールか何か。陽平は用具室けん資料室に段ボールが山積みされているのを思い出した。

校舎に向かって走り出した陽平に、圭子が声をかけた。

「陽平くん、もう終わったの？」

陽平はこたえず、昇降口に急いだ。だれもない廊下を堂々と走り、陽平はほんとうは子どもだけで入つてはいけない用具室けん資料室に入った。

あるある。資源ゴミとして、陽平もよく先生にたのまれて運んださまざまな大きさの段ボールである。おあつらえむきの大きさの段ボールをぬき、折つて上着にかくした。

何気ないふうをよそおつて陽平は雪穴にもどつた。

大丈夫。小ぶりの穴はそのままだ。ほかのやつらは見向きもしていない。遊び半分で雪穴をほっている。陽平みたいにムキになって雪穴をほる子どもなんてそうそういない。陽平の行動に注意をはらっているやつもない。

よく見ると、例の穴はけっこう深い。大人の肩くらいの深さか。陽平はすばやく穴に段ボールを乗せてふたをした。それから、ザラメ雪をうすく乗せ、段ボールの茶色を見えなくした。

そして、泉を呼びに行く。泉はヒロキと雪玉を投げ合っていた。陽平は右手親指で(こつちへ来い)という動作をして言った。

「雪あなの仕上げは、おまえがやりな」
泉はポニーテールをひるがえし、意外とすなおについて来た。
(しめしめ・・・)

陽平はうれしさをかくし、何気ないふうで穴に向かった。

見ると、桜田先生が雪にひざをつけて陽平の穴をのぞきこんでいる。2人が近づくと、感心して陽平に言った。

「すごいわね、陽平さん。こんな大きな穴をよく1人でほれたこと！」

陽平は照れてこまった。タイミングが悪い。教室へ帰ってからみんなの前でほ

めてもらいたい。

桜田先生は立ち上がり、後ずさりしながら陽平の穴を見ている。

「外側から見ると、月のクレーターみたい！」

先生は、さらに後ずさる。
(まずい！)

先生のすぐ後ろに例の穴がある。陽平は何か口実を言つて先生をこつちにもどしたいが、言葉が出ない。すぐ側に泉がいるので、悪知恵がうまくはたらかないのだ。先生は下がりながら校庭全体のクレーターを見渡した。

「雪国つてすてき。ファンタジーの世界に舞いこんだよう・・・」

キヤアツー」
みごとに落ちた。

桜田先生は肩まで雪穴にはまり、初めハトが豆鉄砲をくらったようにぼかんとした。すごいこまった顔の陽平。

そのうち、なぜか、桜田先生はもうれつに笑い出した。

「ハツハハハツ！」

先生の笑いはなかなか止まらない。とうぜん、まわりの3年生たちが、「どうしたの」と言いながらどよどよ集まってきた。

穴にはまって笑っている桜田先生をか

こんで子どもたちの輪ができた。

「あれま、先生があなにおちてる」

「落としいあなにはまったんでないの?」

「先生、早くでないと長ぐつがびしよびしよになるよ」

いろいろ言われても、先生の笑いは止まらない。そのうち、涙と鼻水が出てきた。それを手の甲でぬぐいながら笑い続けている。

陽平は心配になってきた。先生はびつくりしたあまり、狂ったのではないだろうか。なにしろ、まだ若くて都会育ちで、いなかのことは何も知らないような先生だ。

「アーハツハハハ
ヒツヒヒヒ」

先生は笑い続ける。さすがの圭子さえどう口出したらいいか分からないようである。陽平はいたたまれなくてみんなの後ろに下がった。つと、泉が先生に手をさし出した。

「そろそろ上がったら」

先生は泉の手をにぎり、笑いながら上がろうとするが、力が入らなくてさっさと上がれない。半分くらいはい出した時、泉が穴に飛びこみ、先生のお尻をぐいと押し上げた。

やっと笑い終わると、陽平の方に来た。

涙と鼻水でべちゃべちゃの顔だ。化粧なんかとつくにはがれている。陽平は思わず後ずさる。穴の中できよきよしていた泉が穴の底にあった段ボールをひろい、陽平を見た。その目は、

(ほくを落とすつもりだったんだろう)と言っている。陽平はあわてて目をそらせた。

桜田先生はハンカチを出し鼻水をプンとかみ、涙をふいた。それから、小さくなっている陽平にぱちりとウインクしてささやいた。

「最高よ。わたし、ここのうの大好き」
いたずらを見ぬかれた上に嬉しがりれちやつた陽平は、カアアと熱くなりまっ赤になった。

泉はクールな顔してあさつてを見ている。

蘇我課長の逆襲

蒲原直樹

メトロポリスのベッドタウンである混沌市は、ぼつぼつとリタイアしてくる団塊の世代の街でもある。まだ老人にはなりきれない、心身ともに壮健な男たちが所在なげに散歩する姿を見かける。社奴、社畜と呼ばれるほど会社組織に依存してきた彼らは、会社を出てしまうと何をするにも出来ない廃人同様の存在になりはてる。そんな産業廃棄物のような男たちは、これからどこへ向かいどうやって生きていくのだろうか。

蘇我彦麻呂は混沌市葉暮町の自宅でいらいらしながら連絡を待っていた。定年には間がある五六歳。中堅食品会社の課長を長年務めてきた彼が「自宅待機」を命じられてからもう三ヶ月が過ぎていた。

「心配するな、じきに支店長待遇で呼び戻すから」

上司の富川部長からそんな風に慰められたのを思い出す。

「だいたいどうですよ、みんな課長を頼りにしてるんですから」

部下の波島係長の言葉も浮かんでくる。

(波島にはおれが一から仕事を教えてやった。同期の富川だって営業成績はおれのはるかに下だった。それが富川やつ、専務におべんちやらを使ってオレを出し抜いて、先に出世しやがったんだ……)

その富川部長に押し倒され、医者にも勧告されてしぶしぶ休職したのだが、やっぱりあれはまずかったかもしれない、と思う。たしかにこのところ体調が悪くて時々意識がなくなるし、度忘れしてボカもやったが、休職するほどではなかった。問題はやはり専務だ。

「西武の堤一族のこともあるし、いまだき同族経営というのはどうですかね」

酒の席で自分が言ったというセリフだ。社長の次女と結婚して専務に納まっているあの男は烈火のごとく怒ったらしい。彦麻呂はそれを覚えていない。酒の上とはいえ、まずかったと思う。しかしちゃんと謝ったし、仕事とは別の話ではないか。

「パパ、もう夕飯よ、こっちにお上りなさいな……朝から晩までうちの前を行ったり来たりして、近所の人たちが変に思うじゃないの。いいかげんにしなさいよ」

妻の美恵子が玄関から声をかけた。「もうそろそろ会社から使いの者が来るはずなんだ。電報かもしれない。ちよつとでも早く見たいからな」

玄関へ戻りながら彦麻呂はぶつぶつとそんな事をつぶやいた。美恵子はそれを聞いてため息をついた。

「そんな連絡があるなら電話で来てください。飛脚の時代じゃあるまいし……」

美恵子に皮肉られても彦麻呂は平気だった。

(あんな風に休職扱いにしておいて、電話一本で呼び戻すなんて失礼だ。専務か富川がじきじきに重役用のセルシオで迎えに来るのが筋というもんだ)

しかしセルシオはいままでたつてもやって来なかった。

休職してから三ヶ月と十日目、しびれをきらした蘇我彦麻呂は朝食のあと背広に着替え、玄関に向かった。「どこへ行くんですか」という妻の声に、「会社だ」と一言応え、彼は駅への道を歩いた。

駅について彼は、(女房にはああ言ったが、いきなり会社には行きづらい)と思つた。それでいつも通っていた大手食品卸問屋に方向転換した。そこは駅から会社と反対方向にあった。二五〇円などの切符を買い、彼はそこへ向かった。「こんちわ」

彦麻呂が事務所に入っていくと、そこにいた人々はぎよつとしたように彼を見た。

「蘇我さん、もう退院されたんですか?」

「どういう意味だね?」

女性事務員にそう言われて彦麻呂は驚いて聞き返した。

「波島さんがそう言われましたよ。蘇我さんは頭のほうの病院に入院した、つて」

「波島が？」彦麻呂はびつくりしてポカ
ンと口を開けた。

隣にいた古株の事務員がその後を続
けた。

「そっだよ、波島係長、蘇我さんのあと
を引き継いで課長になって、ずいぶん得
意そうだったよ。なんだか、自分一人で
黒金食品を背負ってるみたいに偉そう
な口をきいてたね。そっだよ、あの人、自
分の長女を社長のお孫さんのところに
嫁がせるんだ、って自慢もしてたっけ」

「そうよ、そうなら次期専務はこの
オレ様だって気の早いこと言ってたね
え」

「蘇我さんのことはもう忘れましよう、
これからはボクが皆さんの面倒を見ま
すよ、なんてことも言ったっけ」

「あの、昼行灯の波島が……そんなこと
を……」

彦麻呂はその得意先でいろんな噂話
を聞いた。そのどれもが彼にとってショ
ックな内容だった。彼は聞いているうち
に気分が悪くなり、早々に辞去して駅へ
の道を歩いた。

ふみの会ニュース (5)

(なんてことだ……あいつら、オレのこ
とを呼び戻すどころか、オレの存在その
ものを抹殺してしまっただんだ……しか
もその先頭に立っていたのが波島だと
は！……)

この日、彦麻呂は自室に閉じこもって
真夜中までぶつぶつとつぶやいていた。
妻の美恵子は夕食も食べずに引きこも
っている彦麻呂に何度か声をかけたが、
返事もしない夫にさじを投げた。

次の朝、美恵子は陽気にはしゃいでい
る彦麻呂を見てびつくりした。彦麻呂は
顔を洗っている間もトイレに入ってい
る間も、口笛を吹いたりハミングしたり
した。珍しくもない朝食メニューを見て、
「すごいね、母さんは料理の天才だ
ね！」とほめたりした。美恵子は夜の間
に何が起こったのかと不思議に思った。
しかし朝食後、夫が着替えて出てきたの
を見てギョツとした。彦麻呂が着ていた
のは黒い喪服と黒いネクタイで、ご丁寧
に黒いサングラスをかけていた。彼の右
手には昔会社の野球部で使っていた金
属バットが握られていた。そして低い声
で歌っているのは「雨に歌えば」だった。
それは昔、まだ結婚前の二人で観た映画
スタンリー・キューブリック監督の『時
計仕掛けのオレンジ』の中で殺人者役の
マルコム・マクダウエルが唄っていた歌
だった。彼女は出かけていく夫に、もう
「どこへ行くんですか」とは尋ねなかつ
た。

蘇我彦麻呂は駅前からタクシーで黒

金食品ビルの前に乗り付けると、何人か
の社員に声をかけられたのを無視し、無
言でエレベーターに乗り込み六階のIT
管理室に登った。そして驚く担当者の目
の前でサーバとミラー・サーバの二台の
コンピュータを金属バットで粉砕した。
ハードディスクはわざわざ取り出して、
特に念入りに破壊した。初老のガードマ
ンが飛んで来たが、彦麻呂が金属バット
を構えながら、

「そんな給料もらっていないんだろ
う？」

と言うと、黙って通してくれた。彼はそ
れから三階の営業部へ降りた。営業部は
たちまちパニックになった。

「課長、ごめんなさい、申し訳ありませ
ん、でも会社のためだったんです、課長
がおかしくなったから後を任せる、って
言われたから、いやいや課長の席に座っ
ていたんです、わたしは課長の代わりな
んか務まりっこないって、そう言ったん
ですよ、ホントです。わたしは、今でも
課長のしもべです」

波島が震えながら偽善的なふざけた
ことを言ったので、蘇我彦麻呂は金属バ
ットを振り上げてまともにその頭に一
撃した。ゴキーンという音がして波島はぐ
うの音もたてずに床に倒れた。

「警察を呼べ、警察を！」

叫ぶ声は富川営業部長だった。彦麻呂
は仕切りで区切られた部長席へゆつこ
りと歩み寄った。

「な、なにをするんですか蘇我さん、こ
れは犯罪ですよ、あなた、刑務所行きに
なりたいたいですか、ご家族も迷惑をこう
むることになるんですよ、それでいいん
ですか？」

「かまわねえよ」

彦麻呂はサングラスを投げ捨て、ドス
の効いた声で応えた。

「だいたい、おまえたちが勧めたからオ
レは心療内科に通っているんだ。頭のほ
うの病院にな。だからオレのやることは
心神喪失者の無意識の行為にすぎない
んだよ。犯罪にはならないんだ。つまり
富川、おまえさんのお陰だよ。そうだろ
う？」

富川は絶望の叫びをあげた。彦麻呂は
恐怖にゆがむ富川営業部長の頭に思い
切り金属バットの一撃を与えた。頭蓋骨
のどこかが砕け、頭の動脈が切れたらし
く部長用仕切りに大量の血しぶきがか
かった。彦麻呂の喪服にも返り血がか
かった。営業部員たちは遠巻きに彼を見守る
だけだった。彼は

「シーンギ・ニンザ・レーン♪」

と低く歌いながら次に専務室を目指し
た。

近藤泰寛君のこと (二)

中井 豊

腰の骨が弱くなり、立つことが全く叶わなくなつてから二年程になる近藤君には、少なくともバリアフリーの旅行でない駄目だった。それで、インターネットで検索し、宿泊施設へ電話して相談することにした。

バリアフリーといっても、短時間の歩行は出来ることを想定している場合が多く、つかまり立ちも無理で、しかも温泉に入りたいたいという条件に合う宿泊施設は実に少ない。入浴は諦め、温泉の湯を掛けるだけで満足するとしても、シャワー用の車椅子は欠かせない。

電話で相談しながら、どうにか富山・信濃大町、白骨温泉に宿を見つけることが出来た。中でも、「かんぼの宿・富山」には最新の身障者入浴用リフトがあつて、好都合だった。それで、富山から黒部アルペン・ルートを通り、上高地を経て乗鞍岳へ行き、高山へ出るという行程にした。

なるべく公共の乗り物を使う方針だったが、一々駅員に依頼するのが気持ちの負担になつたらしく、近藤君の希望で爺ヶ岳登山口でトローリーバスを下りて

から高山まで、すべてタクシーに乗ることになった。タクシーの助手席だと、車椅子と高さが近いので、乗降が楽だった。

昨年四月、近藤君から、
「アフリカへ行けへんか？ ケニヤや。」
と電話が入った。

「お金かかるやろ。」
「その心配はせんというて。家庭教師して貯めたんがあるから。お金は使うためにあるんや。千賀子も連れ出してやりたいと思う。」

「車椅子で行ける？」
「それが、行けるツアーがあるんや。最小催行人数に足らんかったら、個人旅行にしてもええ。現地で野生動物が見たいんや。動けるうちに行つとかな。」

半信半疑でインターネットを調べてみると、何とか行けそうな感じだった。ちよつと予定もない。

結局、近藤君が言っていたツアーは人数が不足で取り止めになった。しかし、アフリカ旅行を専門に世話して別の旅行業者が見つかった。最初のツアーと同

じ条件で個人旅行を計画し、担当者と相談した。どうやら大丈夫そうだったし、少し安かった。医師の許可も下りた。

こうして、昨年の五月下旬に三人でケニヤのマサイマラ国立保護区へ行った。彼はハワイや中国へ透折仲間と行ったことがあるらしいが、私にとつては最初の海外旅行だった。

飛行機では乗務員に、現地ではガイドに親切にしてもらった。それでも、座席にすわつたまま長時間を過ごすのは、身体に應えるようだった。

その十一月、電話があつて、ケニヤへ行つて半年というのに、

「また旅行に行こうよ！」
と言つた。

「いつそ世界一周でもするかい？」
と応じると、

「新聞にピース・ボートの船で三ヶ月で世界一周旅行できるという広告が出た。」

という返事だった。驚くと同時に、動ける間に行きたいと焦っているのが判つた。

私もバンフレットを取り寄せ、

「寄港地で船から下りて動き回ることは無理ではないか。むしろ施設の整った目的地を選んで行く方がよいかも知れないよ。」

と言つと、
「船内で研修みたいなものがあつて、色んな人と話せそうだから、それも楽しみなんや。」
と執心のようだった。

年末に白浜温泉で一泊し、ピース・ボートの旅行も含め、海外旅行の相談をすることにになった。三ヶ月にもわたる旅行はともかく、計画を語り合うことで気持ちが晴れるだろうと思つた。

ところが、予定した日の直前になつて「風邪で行けなくなつた。」
と言つてきた。

年が明け、近藤君から、
「風邪は直つた。ピース・ボートの世界一周旅行の説明会に行つて申し込んで来た。一緒に行つて欲しいけど、無理ならボランティアを頼むつもりや。」
と電話があつた。決意の強いことが伝わつてきた。この電話が最後になった。

人口透析をしなければ、近藤君は手つかずの自然を求めて、もつともつと好きな旅行を楽しんだに違いない。私も一緒に旅行したことだろう。いや、私が行かなくても、あるいは一人で、あるいは他の人と頻繁に出かけた筈だ。

告別式のあつた二月二十八日の朝、式場へ妻と出かけた。よく晴れた朝だった。
(7ページへつづく)

遙かなる戦火

内田幸彦

(四) 軍隊手帖

入隊すると各自に軍隊手帖が交付された。これは軍隊での個々人の履歴書で、他に軍人に必要な事項として、軍人勅諭・戦陣訓が収録されている。

最初の軍人勅諭は明治天皇が一八八二年(明治一五)に出した。大正の軍人勅諭は第一次世界大戦(一九一四〜一八年)に参加した時のもので、昭和のものは山東出兵(一九二七〜二八年)、張作霖爆殺事件(一九二八年六月四日)の頃に出たものと思われる。一九四一年の勅諭は太平洋戦争(当時の大東亜戦争)の時のものである。いずれも将兵の心得と激励が目的である。

大正の軍人勅諭は私達も憶えさせられた思い出深いものだ。

我が国の軍隊は世々天皇の統率し給う所にぞある。昔、神武天皇自ら大伴、物部の兵(つわもの)どもを率い……

の前文と、

一つ、軍人は忠義を尽くすを本分とすべし

一つ、軍人は礼儀を正しくすべし

一つ、軍人は武勇を尊ぶべし

一つ、軍人は信義を重んずべし

一つ、軍人は質素を旨とすべし

の五ヶ条からなっていた。

兵隊は言うに及ばず、私たち学生も軍事教練の際に暗記させられた。全文を憶えろと言われていたが、二〇頁近くの長さとしても憶えきれず困った。

「山田、信義の項を言ってみる」

「次は西川、後半の部分を」

「次ッ、井上、礼儀の項を」

と、何時誰がどの項を暗唱させられるか判らない。憶えていない生徒は戦々恐々としたものだ。吃ったり詰まったりすると、《往復ヒンタ》が飛んできた。

戦陣訓は、本訓その一方で、戦時の軍人の心得を説いた。本訓は、

第一、 皇國

第二、 皇軍

第三、 軍規

- 第四、 団結
- 第五、 協同
- 第六、 攻撃精神
- 第七、 必勝の信念

と、詳細に軍人の心得を並べている。本訓その二は、

- 第一、 敬神
- 第二、 孝道
- 第三、 敬礼挙手
- 第四、 戦友道
- 第五、 率先躬行
- 第六、 責任
- 第七、 死生観
- 第八、 名を惜しむ
- 第九、 質実剛健
- 第十、 清廉潔白

など。

更に、本訓その三までであるが、詳細は省略する。

軍隊手帖の末尾には個々人の軍歴が記されていた。

一八七三年(明治六)、徴兵令が布告され、男子二〇才になれば兵役に服する義務を負うことになった。これを「国民皆兵制度」と言う。一八六八年(明治元)、浜口梧陵翁(和歌山県広川町出身)が、農兵制を案出し、紀州藩主に進言したも

のが、この制度の基礎となったと聞いている。

浜口家は広川町の豪族で、梧陵翁は『稲村の火』の話の主人公だ。或る日、押し寄せた大津波を丘の上から望見した翁が、村人に急を知らせるため、採り入れたばかりの自分の稲に火を放ったという話である。『小学国語読本・巻十』に出ていたから、思い当たる人もあるだろう。他にも、自費による大防波堤の構築、医学への貢献、郵便制度、学校の創設、など篤行の人だった。

(6 ページのつづき)

棺の窓を開けて見た近藤君は、もつと旅行がしたかったと言っているように見えた。親族以外の参列者は私達だけだった。

こんなことなら、迷うことなく、「よし、ぜひ行こう!」

と快く世界一周の計画に賛成するべきだった。思いやりから、私にさえ気兼ねし、その風も見せずに旅行の話を持ち出した近藤君だった。そのように、今になって改めて思う。

重病を抱え、三〇有余年もの年月を、どういいう人生観で支えてきたか——それを近藤君に学びたかった。

ヒカル君の冒険

藤川博樹

ヒカル君野山を駆けめぐる

ヒカル君の家の回りには田んぼや池や林や山があった。川や山や、そこへ連なる道の形というのとはとても不思議なものにヒカル君には感じられた。山や畑や空き地の連なりというのほどこまでもどこまでもつながっていて、歩いて歩いても知らないその向こう側の世界があるようだった。

ヒカル君のおむつがとれない一歳の頃、二軒長屋の家の西側の井戸端でおかあさんが洗濯をされていて、ふと気づくとヒカル君がいない。はっとして顔を上げると、家の裏手に広がる野原の向こうの土手をヒカル君がよちよち這い上がり、まさに向こう側に越えようとしているところで、おかあさんがあわてて走って行って、ヒカル君を連れ帰った。

ヒカル君には、見晴らす野原のはてに視界を遮っている土手を越えた向こうに何があるかがとても不思議だったのだ。

わんわんのお家

二軒長屋の隣の家は、田中平八郎氏の家で、縁側がつながっていたので、ヒカル君はいつもそこをつたって隣を家に顔を出した。その家では、犬を二匹飼っていたのでわんわんのお家と言っていた。家中毛だらけだったので、おかあさんはヒカル君がその家に行くのをあまりいいと思っていなかったが、わんわんの家のおばさんはヒカル君が生まれた日に大きな白クマの人形を買ってきてきてくれ、ヒカル

君をとっても可愛がってくれた。

ヒカル君は、隣の家とつながった縁側を、ガラス戸につたい歩きしながら行き来した。片足で飛び跳ね、「えつきぼん、えつきぼん」といいながら跳んで行き、跳んで帰ってくる。その言葉がどういう意味かは大人にはわからなかった。

ヒカル君が二歳半の時に弟が生まれた。ヒカル君は自分の家で産婆さんに取り上げられたが、弟が病院で生まれた。ベットの隣の奥さんが、赤ん坊に「これからおにいちゃんと言うのよ」と話しかけると、ヒカル君が赤ん坊に顔を傾けて「おにいちゃん」と呼んだので、病室の人たちみんなが笑った。ヒカル君は病室の人たちを意識して、ギャラリーを意識してわざとらしく呼びかけたのだが、大人たちにはたあいのない子どもの言い間違いと思つてほへえんだ。

